

【12頁, 10行目】

(誤) さまざまな流儀

(正) さまざまな流儀

【31頁, 導出図の例4の直前】

(削除) (いわば「メタ導出図」)

これを「メタ導出図」と呼ぶのは不適切。あえて言うなら「マクロ導出図」?

【47頁, 真ん中あたり】

(誤) $\text{suc}^{\mathcal{N}}(\dots, \text{P}^{\mathcal{N}}(\dots, \text{Q}^{\mathcal{N}}(\dots, (x \text{ が血液型が } \dots$

(正) $\text{suc}^{\mathcal{H}}(\dots, \text{P}^{\mathcal{H}}(\dots, \text{Q}^{\mathcal{H}}(\dots, (x \text{ の血液型が } \dots$

【52頁, 12行目】

(誤) $\text{suc}^{\mathcal{M}}(a) = \text{suc}^{\mathcal{M}}(b)$ になるので,

(正) $\text{suc}^{\mathcal{M}}(\mathcal{M}(a)) = \text{suc}^{\mathcal{M}}(\mathcal{M}(b))$ になるので,

これは完全に誤りとは言い切れないが, 訂正する方がよい.

【57頁, 定理4.1.1 (健全性定理) の文面3行目】

(誤) $\varphi, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_n$ 中に自由出現しない

(正) A 中に出現しない

現状でも定理の主張は誤りではないが, 証明に不備がある (たとえば $[\rightarrow \text{除去}]$ の場合に x_1, \dots, x_k 以外の変数記号が ρ 中に自由出現する可能性を考慮していない). 証明を変えてもよいが, この場合は定理の文面を変える方が適切である.

【69-70頁, 定理5.2.1を用いた定理5.1.7の証明中の(ア)と(ウ)の証明】

現状でも誤りではない. しかし次の事実を示してそれを用いて証明する方が簡潔である: 任意の閉論理式 φ について $\varphi \vdash \varphi^\#$ かつ $\varphi^\# \vdash \varphi$.

【74頁, 9行目】

(誤) ... どちらも Γ に ...

(正) ... どちらも Γ^+ に ...

【105 頁, 8,9 行目 (2カ所)】

(誤) 閉論式

(正) 閉論理式

【118 頁, 8.2 節 2 行目】

(誤) 「ヒルベルト流」よばれる

(正) 「ヒルベルト流」とよばれる

【120 頁, 定理 8.2.2 の文面】

(誤) 任意の論理式 φ に対して次の三条件は同値である.

(正) 任意の論理式 φ に対して次の条件 (1)(2) は同値である. さらに φ が閉論理式の場合は (3) も同値である.

【124 頁, 系 8.3.3 の文面】

(誤) 任意の論理式 φ に対して次の四条件は同値である.

(正) 任意の論理式 φ に対して次の条件 (1)(2)(3) は同値である. さらに φ が閉論理式の場合は (4) も同値である.

以上 2カ所の訂正は, 本書では「恒真」という概念が閉論理式に対してだけしか定義されないことによる.

【151 頁, 6 行目】

(誤) 条件 (1)~(4) が

(正) 条件 (1)~(3) が

【159 頁, 定義 11.1.3 の冒頭】

(誤) 記号 \models の使い方

(正) 記号 \Vdash の使い方

【159 頁, 定義 11.1.3 の (2)】

(誤) \dots が $\text{Dom}(W_i)$ の要素の名前のとき,

(正) \dots が $\text{Dom}(W_i)$ の要素 (の名前) のとき,

【162 頁, 定理 11.2.1 の証明の 3 行目】

(「 A の結論を $(\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_n \Rightarrow \varphi)$ とし」の後に次を追加)

(ただし右辺が空の場合は以降の φ を \perp に読み替える)

【162 頁, 定理 11.2.1 の証明の 4 行目】

(誤) $\varphi, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_n$ 中に自由出現しない

(正) A 中に出現しない

先述の「57 頁, 定理 4.1.1 (健全性定理) の文面 3 行目」の訂正と同じような状況である.

【165 頁および 177 頁, ダイアグラムの根の左側】

(誤) $\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_m$

(正) $\varphi_1, \varphi_2, \dots, \varphi_m$

【171 頁, 9 行目】

(誤) $\dots y$ は \mathcal{T}_i に出現しない \dots

(正) $\dots y$ は追加前のダイアグラムに出現しない \dots

【171 頁, 下から 6 行目】

(誤) 以上が \mathcal{T}_i から \mathcal{T}_{i+1} の作り方であり, このようにしてできる列 $\mathcal{T}_0, \mathcal{T}_1, \mathcal{T}_2, \dots$ の「極限」である無限和 $\bigcup_{i=0}^{\infty} \mathcal{T}_i$ が求める飽和整合ダイアグラムになる.

(正) 以上の追加作業を \mathcal{T}_i 上のすべての印に対して施した結果が \mathcal{T}_{i+1} であり, こうしてできる列 $\mathcal{T}_0, \mathcal{T}_1, \mathcal{T}_2, \dots$ の累積 $\bigcup_{i=0}^{\infty} \mathcal{T}_i$ が求める飽和整合ダイアグラムになる.